慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	はじめに
Sub Title	Preface
Author	前田, 富士男(Maeda, Fujio)
Publisher	慶應義塾大学アート・ センター
Publication year	2006
Jtitle	Booklet Vol.14, (2006.) ,p.[5]- [6]
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000014-04211366

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はじめに　Preface

「いつの頃からか、私に＜オブジェの店＞を出すという観念が発酵し、それがばかにならない固執であることに気づきはじめた。いうまでもなく私は企業家や商人とはまったく異なったシステムで、それを考えていたのだ」（「物々控」1965年）。

瀧口修造（1903-1979）は、第二次世界大戦後の日本を代表する美術評論家で、とくにシュルレアリスムの研究者として世界的に知られる。同時に、詩人、また画家としても、優れた作品をのこした。瀧口の活動は、慶應義塾大学在学中に教えをうけた西脇順三郎やシュルレアリスムの影響のもとに始まった実験的な詩作から、戦後、日本の前衛芸術の精神的支柱とみなされた美術評論や、みずから取り組んだデカルコマニーの制作など、多岐にわたる。

けれども瀧口修造の本領は、やはり＜オブジェの店＞あるいはその店主としての活動に見いだすべきなのだろう。周知のように、＜オブジェの店＞は未完の構想にとどまった。瀧口は第29回ヴェネツィア・ビエンナーレの日本代表としてイタリアにわたった1958年ころから、いわばジャーナリズム的な美術評論からしだいに距離をとりはじめ、自身の位置をデカルコマニーほかの制作にさだめてゆく。とはいえ、その活動は個人の境域に囲い込まれはしない。あの伝説的な西落合の瀧口家の書斎に訪問者が途切れなかったように、この書斎の主、あるいは＜店主＞は、芸術的感性を屋台骨とする独特な文化的コミュニティ空間をつくりだそうとしていた。

「私は企業家や商人とはまったく異なったシステムで、それを考えていたのだ」。誰しも、この1965年の発言の前景に1960年の日米安全保障条約の改正に反対する安保闘争という市民運動を、その後景に60年代後半における世界的な大学紛争を想定するにちがいない。だが、瀧口のいうシステムは、企業家や商人のみならず、政治家や大学人のそれとも当然異なる。ではそれが画壇・文壇という言葉が集約する芸術家的世界かといえば、むろんそのはずもない。くわえて前衛芸術家といえども、あながちこの＜店＞の特権的な客にはなりえまい。1960年代はいわば、アート・ワールドの確立期にほかならず、ヴェネツィア・ビエンナーレといえども、文化トゥーリズムに組みこまれてゆく以上、やがてドイツ・カッセルの現代美術展「ドクメンタ」にその地歩を譲らざるをえない推移となる。鋭敏な瀧口はこうした趨勢をよく見通していたにちがいない。そのうえでこの稀代の生活者は、＜オブジェの店＞なる＜システム＞を構想していた。

東京の佐谷画廊佐谷和彦氏は、1981年第1回「オマージュ瀧口修造」展から

昨年2005年の第27回オマージュ瀧口修造展「平沢淑子」にいたるまで四半世紀にわたって「瀧口修造」という存在にむけた展覧会を開催しつづけ、高度な研究内容を備えた展覧会カタログを出版してきた。さらに今後も継続の予定だが、こうした画廊活動は世界に類をみない優れた業績にほかならない。佐谷氏の情熱と努力を支えているのは、じつは芸術的感性の＜システム＞をめぐる瀧口修造の呼びかけに応答しなければならないという責任感であろう。瀧口の＜システム＞や＜店＞とは、知的かつ感性的な場、日常と芸術の世界を交通する場であり、同時にその形成を現代社会のわれわれにアピールする物静かな挑戦状以外の何ものでもない。

瀧口修造のご遺族鈴木陽氏から貴重な資料が慶應義塾大 学に寄贈されたのを機に、2001年4月、アート・センターは「瀧口修造アーカイヴ」を開設した。すでに瀧口修造関連の資料のうち、収集作品類は富山県立近代美術館に、蔵書類は多摩美術大学に収蔵されており、慶應義塾大学アート・センターに寄贈いただいた資料コーパスは、第二次世界大戦直後から1979年の逝去にいたるまでの活動を反映する多様な領域にまたがる。具体的には手稿、ノート、書簡、書類などの書写資料、画稿ほかの造形資料、パンフレット・ちらしなど一過性資料、ほかに写真、日用品、図書、雑誌類にわたり、一万点以上を数える。制作素材となりうる文字通りのオブジェ的物品も多い。

資料の受託にあたってアート・センターの鷲見洋一所長（当時）以下、田中淳一、柳井康弘、私が大井松田の鈴木家で予備調査を行わせていただいたとき、われわれは＜オブジェの店＞のシステムの一端にふれた思いで、その後の資料研究の責任の重さを痛感し、調査の手を休めざるをえないほどであった。鈴木陽・みつ子ご夫妻から心温かいお励ましをいただきながらどうにか作業をつづけ、そして今日までアーカイヴの構築と資料研究を一歩一歩すすめてきた。アーカイヴの仕事は存外「オブジェの店」にふさわしい。

研究成果の一端は、2005年12月に慶應義塾大学日吉構内の来往舎ギャラリーでアート・センターが開催した「瀧口修造1958――旅する眼差し」展で示した。本誌は、この展覧会と並行して出版する論文集である。

あらためて、本誌寄稿者の方々、ならびに瀧口修造アーカイヴの設立と日ごろの運営・活動にご支援をいただいてきたご遺族の鈴木陽・みつ子様、河村明・真弓様、また岡崎和郎氏、佐谷和彦氏ほか関係各位に謝意を表する次第である。

慶應義塾大学アート・センター所長　前田富士男